

一葉全集

第五卷

一葉全集

第五卷

筑摩書房版

一葉全集

第五卷



昭和三十年一月三十一日 初版發行
昭和三十一年八月五日 再版發行

定價 四百八拾圓
地方賣價 五百圓

編纂者

塩田良平
和田芳惠

發行者

古田晁

印刷者

中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話東京二九局(28)七六五一(代書)
振替東京一六五七六八

一葉全集

第五卷目次

和歌

卷一

詠草

一

卷二

詠草 一

五

(附)書入

卷三

無題

一五

卷四

無題

三

卷五

點くらべ

五〇

卷六

無表紙

五四

卷七

詠草

六

卷八

無題

七四

卷九

詠草

九

卷十

戀百首

一〇四

附録 戀百首点くらべぬきがき

卷十一 若艸 卷の三

卷十二 詠艸

卷十三 みやぎ野

卷十四 もしほ草

卷十五 詠草

卷十六 詠草

卷十七 詠艸

附録 もしほぐさ

卷十八(一) 詠草

卷十八(二) 詠草

卷十九 詠草

卷二十 四季戀雜園のわか艸

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

卷二十一 底のもくず 卷之一

卷二十二 無表紙

卷二十三 詠艸

卷二十四 詠艸

卷二十五 詠艸

卷二十六 みやぎ野

卷二十七 戀の哥

卷二十八 えい草

卷二十九 戀廿題かずよみ

卷三十 詠草

卷三十一 詠艸

卷三十二 みやぎ野

卷三十三 詠草

二〇九

二一〇

二一一

二一二

二一三

二一四

二一五

二一六

二一七

二一八

二一九

二二〇

二二一

卷三十四 櫨のしづく

卷三十五 詠艸

卷三十六 みやぎ野

卷三十七 詠草

卷三十八 した草

卷三十九 詠草

卷四十 森のくち葉

卷四十一 詠草

卷四十二 うたかた

卷四十三 廿八年和歌斷簡

卷四十四 廿九年和歌寄せあつめ

歌集補遺

解説

二九四

二九八

三〇三

三〇九

三一

三二六

三三〇

三三三

三三五

三三九

三三三

三三七

三八五

卷一 詠草

- | | | |
|-------|---|--------------------------------|
| 春風不分所 | 1 | おちこちに梅の花さく様見ればいづこも同じ春かぜやふく |
| 名所若菜 | 2 | たのしさにさとのわらべはとくおきてわかなつみにといづる春日野 |
| | 3 | 賤の女がいろ／＼きぬをはせをりてわか菜つみにといづるかすが野 |
| | 4 | わが袖のぬるゝとしらずわらはべが春の野もせに若なつむらむ |
| 柳隨池水 | 5 | かげうつす柳の糸の長ければおのづと池の波やよすらむ |
| 春雪欲消 | 6 | 消殘る松の白雪とけぬらんかすみをはらふ春の山風 |
| 關屋煙 | 7 | 朝まだき賤が關屋にたなびくはすみやくかまの煙りなりけり |
| 夜風告梅 | 8 | 心よく夜半の春風吹渡りふしみの梅は咲そめにけり |
| 寄糸戀 | 9 | いかでかくそむればそまる白糸の何につれなき色や見せけん |

澁夜春雨 10 さらでだにひとり丸ねのさびしさに打しめりふる夜半のはるさめ

教題 晴天鶴 11 くもりなき天津御空にまふ田鶴のこゑにぞ千代はこもりけるかな

同 12 久方の雲井に遊ぶあし田鶴も君が千とせを祝ふなるらん

13 晴れ渡るけしきぞまさる初春のくもるをかけるつるのひと聲

梅 14 誰にかも先づ告げやらん庭もせのうめの一枝さき初めにけり

15 小夜ふけて枕にかをる梅が香は目に見ぬ先に開くをぞしる

同 16 春くればをりしり顔に吹出て梅が香さそふのきの春かぜ

霞 中月 17 花のさく時としるかやおのづからのどかにかすむ春の夜のつき

同 18 空高くなくかりがねもとまるらんおぼろ／＼とかすむつきかな

花 下月明 19 さく花の色香もいとどまさるらんほの／＼月もさしのぼりけり

花 慰老 20 春毎にたがへず咲けるさくらこそおひをなくさむすがなりけり

梅 21 山しづのあれし垣根も人とまる庭の梅が香咲初めしより

語 戀 22 しのべどもたぎつ岩波打出てつゝみかねたるわがをもち哉

- 鶯 23 霞み立此うめが枝にねぐらしてのどかにうたふうぐひすの聲
 同 24 梅が枝をわが宿としも定めけん年にかわらずすくふうぐいす
 望山待花 25 春霞み花待山に立なせそ盛りの花のかくれもぞする
 同 26 かの山のたよりは聞かねいざゝらば霞みがくれに花やさくらむ
 同 27 はらいかね岩ねふみ分けながむらむかなたの山の花を待ちつゝ
 櫻 28 朝日さすかの山櫻尋ね來て夢の心ちのきのふけふかな
 深夜春雨 29 をり／＼に庭の草葉におとづれてしめやかにふる夜半のはるさめ
 同 30 こよいふる此一さめにほころびんひらく間ちかき庭のさくら木
 霞中月 31 山鳥りの尾上の月の影更てをぼろ／＼とかすむ春かな
 四方開花 32 野も山も皆ま盛りになりけり何づれのはなをながめ行かまし
 櫻 33 吉野山かすみ分けてぞ尋入しるべもわかぬはなのやまみち
 34 み吉野のみねの櫻の咲しよりいたり尋づねぬ山のはもなし
 山家花 35 山里のあれしまがきもかくれなん今を盛りと咲けるさくらに

- 桃 花 36 三千年のよはひたもつと聞からに世になつかしきひめもゝの花
- 松 間 花 37 枝かはす松の木の間の山櫻干とせならびて立やかへまし
- 柳 間 鑑 38 春ごとに緑りそひ行青柳をおのが物とかうぐいすのなく
- 福 壽 草 39 こがねをば花となすさへうれしきにふくを名によぶくさの目出たさ
- 菜 花 40 七重八重咲く山吹に先だちて年のはじめにめぐむ菜の花
- 野 遊 41 すみれさく野をなつかしみうないごがけふもそとろにあそびくらしつ
- 燕 42 いづこにかしるしの糸はつけぬらん年々來なくつばくらめ哉
- 一人見花 43 うかれ立野山の花に打はなれ一人かげしむ家ざくら哉
- 折 花 44 さくら花あかぬ心に皆ひとの手毎にかけてをりにけるかな
- 戀 花 45 さくらばなへだてゝ見るも中々にちかきにまさる色はありけり
- 花 留 人 46 ちる迄は花の木かげに宿らましゆくゑもわかず咲みちにけり
- 47 まど近き軒の小川に見へにけりみ吉野山の花はさきなん

卷二 詠草 一

折草花	1	秋萩の枝もたゆげに咲花をあらぬころに手折つるかな
深秋虫	2	礎うつ聲も聞へず成にけり秋やふけぬらんまつ虫の鳴
秋風涼	3	いつの間に衣こひしく成ぬらん身にしみさるをぎの上風
雨中萩	4	村雨はいたくなふりそ庭の面の萩の一村をれやしぬらむ
荒庭虫	5	とふ人も絶てあれたる宿なれど蓬が庭にまつむしのなく
	6	人とはであれたる庭に鳴虫は友や戀しきしもやわびしき
松間月	7	あらし山みねの嵐に雲はれて松の木の間に見ゆる月かげ
	8	ときわなる松の梢を出かねてはつかに見ゆる秋の夜の月
秋夕雨	9	秋といへば心さびしき夕暮にあはれをそゑて村雨のふる

枕邊虫 11 村雨のふる音聞ばいとゞしくさびしさまざる秋の夕暮
小夜更て枕にちかく鳴虫は寢覺のとこの友にもある哉

待 鴈 12 いをやすく寐られざりけり枕にもあとにも虫の聲しきりつゝ
13 わが宿のまがきの菊の咲ぬ迄初かりがねは待ど來鳴ぬ

14 思出てこそこの今宵は鳴にしと月に待るゝ初鴈のこゑ

山 霧 15 から衣立田山をよる行ば道まよふ迄立るやゑ霧

月前雲 16 寐屋の戸もさゝで待つる月影にあやなくかゝる雲ぞわびしき

月前松 17 出るより海邊さやかにてゐる月に千代の立そふ住吉のまつ

18 幾秋もかはらぬ友と庭の面の松にいざよふ夕月のかげ

山 朝 霧 19 小ぐら山はつかにはるゝ朝ぎりになしきこもれる初紅葉かな

月前掛衣 20 たれも又今宵の月にいね兼て永き夜すがら衣うつらん

放 虫 21 所せきかこの内をばはなたれてうれしげになく虫のこゑかな

22 住なれし元の草葉にはなたれて虫もまことの音をや鳴らん

鹿 聲 幽	23	吹をくるそよとの風にさそはれてかすかに聞ゆ小男しかの聲	
	24	それとしも聞分ぬ迄かすかなる鹿の鳴音に袖はぬれけり	
朝 聞 鴈	25	妻戸明てうち見る空に鳴鴈の聲めづらしき朝ぼらけかな	(七・58)
	26	明て猶おき出やらぬ寐屋近く夢をどろかす初かりの聲	
雨 後 待 月	27	村雨のさしたる窓を又あけて月を待くなりける哉	(七・67)
	28	村雨の名残の雲の晴行ば更に月にぞ待れそめぬれ	(七・68)
秋 蝶	29	百草の匂ふ花野にとぶ蝶はさびしき秋もしらず顔なる	(七・80)
	30	人みな物思ふ秋をよそにしてあそぶ小蝶のおもしろき哉	(七・81)
野 鶉	31	小萩さく遠里小野のかた鶉妻こふ聲ぞあはれなりけり	
	32	深草やあれにし野邊になく鶉秋の夜さむをしのびかねつゝ	
夜 々 聞 鴈	33	待わびし時もありしが此頃は聞ぬ夜もなきかりの聲哉	(七・60)
河 邊 鶉	34	渡し守よべどこたゑず河霧に聲さゑつゝむ隅田のあけぼの	
茸 狩	35	おもふどち秋の山邊に打まれて落葉がくれのたけやからまし	

36 秋ふけて守山さむく成にけりしめじくりたけいざや狩てん (七・82)

紅葉淺 37 立田ひめ手染の色の淺くしてあはれに見ゆるみねの紅葉々

38 おく山はいかにやあるらんおもほえず色まだ淺き庭のもみじば

月出山 39 小ぐら山みね立ならしなく鹿にさはれいづる月のかげ哉 (七・71)

月下烏衣 40 夜もすがら賤が聲々聞ゆ也月にうかれて衣うつらん

41 是だにも衾とぞ見る月影にまだ打そゆる里の夜ぎぬた

水邊菊 42 かげうつす野川の清水いざ汲んみぎりの菊の香にや匂ふと

折紅葉 43 をく山の紅葉一枝を行んこのあたりには見る人もなし (七・75)

44 わが宿の紅葉色こくなりにけり手折ておかん散そめぬ間に (七・76)

暮秋虫 45 くれかゝる秋の末野に來て見ればやゝよりはり行虫のこゑかな (七・85)

46 枯々に聲は成けり松虫の秋のあはれを鳴つくしけん

47 松虫と名にはよべ共秋盡て霜に枯行聲のあはれさ

雨後紅葉 48 ふりやみし時雨や深く染にけん露に色そふ庭の紅葉々

暮秋野

49 村雨の名残の露に色そへて夕日まばゆき庭の紅葉々

50 行道もなきまでをひししの薄かぞふるほどに野は成にけり

51 埋もれし野中の清水かげ見へて干ぐさ枯行秋のくれがた

52 うらがれし荻吹風のさえ渡り暮る間近き秋の野邊かな

月夜訪友

53 さしのぼる月影清しいざらばとはや今宵友のあたりを

54 心合ふ友の家居をいざとひて月の夜すがら語り明さん

谷紅葉

55 深山木は紅葉しにけんかげうつす谷の清水に色見えにけり

56 木がくれて有共常に見えざりし谷間の紅葉あらはれにけり

暮秋雨

57 暮て行秋のあはれをそへがてに落葉まじりの時雨ふるなり

58 かき暮しふる村雨のいと寒しこの夕暮に秋や行らん

初冬

59 吹すさぶ夜風や冬をさそひこし火おけ戀しく今朝はなりけり

60 きふ迄いぶせしと見し厚ふすま重ねる冬と成にけるかな

山家初冬

61 聞なれし松風あらくなり行て冬は來にけり山かげのいほ